

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部・2年 (平井良江)

今回の研修を通じて、『家族』というものを改めて考えさせられた。フィリピン人家庭は日本の家庭に比べて非常に濃いつながりを持っており、今回の研修中も「家族のため」という言葉を何度も耳にした。その「家族のため」に出稼ぎに出る行為をどう捉えるべきなのだろうか。研修前、日本の中学校でJFCの学習支援を行っていた際、親の事情に振り回され、日本とフィリピンの文化の違いの中で葛藤するJFCの姿を見ていたため、正直出稼ぎに対してあまりいいイメージを持っていなかった。研修後も決していいイメージを持つようになったわけではないが、より多面的に出稼ぎや家族のありかたについて考えることが出来るようになったと思う。

JFCのお母さんと交流した際、「日本へ行ったのは子供の学費を稼ぐため」とおっしゃっており、ほとんどの出稼ぎ労働者は自分一人生きていくためではなく、家族、もしくはもっと広い親戚のために仕送りを行っているのだと知った。現在多くのフィリピン人が肉体労働、家政婦、介護士、エンターテイナーなど様々な形で出稼ぎに出ている。出稼ぎに出ることで、家族とは離れ離れになり、フィリピン政府の目の行き届かない場面が多くなり、多くのフィリピン人労働者が被害を被っている。そうしたデメリットを抱えてまでなぜ出稼ぎに出てくるのか、フィリピンで働いて家族を支えるということはできないのか。フィリピンに来るまで疑問に思っていたことはしかし、実際フィリピンに来てみると、合点がいった。空港では手持無沙汰な警官が暇そうに携帯をいじり、商品を体に纏った子供から老人までの多くの人が車の間を売り歩いている。日本語学校に通うほとんどの女性は無職で、わずか5、6人しか選ばれないエンターテイナーのオーディションに100人近くの若い女性が集まる。そうした状況を目の当たりにして、フィリピン人にとって出稼ぎという行為は、日本では考えられないほど当たり前の選択肢なのだと感じた。そして、そうした選択肢を選ぶ背景には、ほとんどの場合「家族のため」という考えがあった。

JFCと交流する機会を設けてもらった際、姉弟仲や親子仲が非常によく、互いを大切に思っているのだと感じた。日本では家族や親戚との関係が疎遠になって、親を介護したり、子供の面倒をちゃんとみたり、という昔は当たり前だったことが難しくなり、社会問題化している。この日本の状況と比べて、フィリピンの家庭のつながりの深さは私にとって非常に羨ましく感じるものであった。しかし一方で、家族を大切に思うが故に「家族のため」に自分に無理を強いている部分があるのではないかと感じた。出稼ぎに出て、思っていた仕事と違ったり、暴力や差別をうけたりしたとしても、「家族」という守るべき存在があることで、逃げにくくなり、帰ってきてもまた出稼ぎに行く、といったことが起こっているのではないだろうか。エンターテイナーのオーディションでも、「責任感があるからシングルマザーの方が望ましい」とお店側の人と話しており、家族に対する責任感や家族を想う気持ちが出稼ぎの原動力になっているのだと感じた。

日本に出稼ぎに来るためには、多くの複雑な入国手続きを行う必要があり、その過程で関わるブローカーらに給与の多くは取られてしまう。さらに、日本で介護士や看護師として継続的に働くためには長期間の就労経験と十分な語学力が必要とされ、多くの面で困難が立ちはだかる。エンターテイナーとして働く場合も、ダンスや歌が出来るのは当然で、日本で働いたことのある女性が優先的にオーディションで選ばれるため、新たに選出されるのは難しいようである。また、日本でエンターテイナーとして働く際、基本的に客の隣に座ることは禁止されているが、多くの店でセクハラを容認もしくは強制されている場合があり、ショックを受けるフィリピン人女性も多いという。それでも、多くの若い女性たちがオーディションに殺到している様子を見て、彼女らの理想と現実が合致しているのだろうかと思えるとともに、その原動力となっている家族の存在の大きさを感じた。

しかし、今回研修に参加して本当に多くのことを見聞きし、自分の中で消化しきれなかった部分が非常に多かった。今まで全く知らなかったことに出会ったことで、もっとフィリピンのことや日本との関係、法や制度などについて調べ、色々な人と考えを共有したいと思うようになった。今回の研修で知ったことや感じたことを何度も振り返り、新しい知識も入れながら、家族のことや出稼ぎ、法制度などを個人レベル・社会レベルなど様々な視点からじっくり考えてみようと思う。

この研修に関わってくださった全ての方に、このような貴重な経験をさせていただいたこと感謝いたします。